

二〇二〇年六月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）所収の「銀作」を読みました。

六月の「森三郎の作品を読む会」は、二月以来四か月ぶりの集まりでした。この日に読んだ作品「銀作」は『赤い鳥』一九三三年五月号に「野上進」の筆名で発表されました。冒頭の三文で、読者はすぐに物語の背景が分かります。

十二になる銀作は、身分の低いさむらいの子で、町人の子に行く小さな寺小屋へ通っていました。（寺小屋はママ）銀作のお母さんの実家は和泉屋という木綿問屋で、銀作の家のじき近くでした。和泉屋には銀作と同一年の千代吉という子がいて、同じ寺小屋へ通っていました。

ある日の寺小屋で、お師匠さんが席をはずすと、いたずらっ子の竹松は手習いの墨のついた筆を千代吉の耳の後ろにつき出して、後ろから千代吉の名を呼びます。振り返った千代吉の顔に、思惑通りべたつと墨がつき、それが発端で二人が墨のついた筆を相手にふりまわしているうちに、天神雛の掛物に墨が付いてしまいます。

江戸時代には天神信仰が庶民の間にも流布浸透し、「藩校や寺子屋・各私塾でも手習い学問の神として崇敬された」（『国史大辞典』「天神」の項、吉川弘文館）といえます。大事な掛物に墨が付いてしまったことから、子どもたちは動揺します。よく切れる小刀で墨の所を削り取ってしまえば分からなくなってしまうと考えた竹松は、だれか小刀を持つてないかと、皆に救いを求めます。銀作の心には、泣き伏しているいとこの千代吉のために自分の小さい刀を出すべきか、刀をそんなことに使ってよいものかという葛藤が生じます。

お師匠さんに留め置きされた千代吉を残して一人で帰る銀作は、「和泉屋」の前でおばさんに声を掛けられるのも振り切って「おれはひきょうものだ、ひきょうものだ」と言いながら、ぐんぐん走って家に向かいました。思いつきり走る姿に心の中の思いを象徴させる描写法は、『赤い鳥』の森三郎の他の作品にも見られました。「雪」（一九三三・四）でも、母への怒りを胸に抱えた主人公の弘は雪の中を駆け抜けていき、後ろから呼びかけられる声も聞こえないほどでした。「一人相撲」（一九三三・七）でも、主人公の庄太は友達の勘ちゃんに対する苛立ちから、声を掛けられても返事もせずに、勘ちゃんの手先へ先へと大股に歩き続けました。自分の心の揺れに自分自身では十分に対応できない思春期の少年の日常をよくとらえていると言えるのではないのでしょうか。

「読む会」で順番に声を出して「銀作」を読み終わった時、「あれ、こんなに短い話だったかしら」という感想が異口同音に出ました。刀を貸すべきかどうかの葛藤、結論を出す前に場面が変わってほっとしたものの、最後には自分を「ひきょうもの」と責める銀作の心の変化が、四百字詰め原稿用紙に換算すると八枚弱の作品の中に一気に描かれているので、短く感じたのだと思います。また、竹松は事が起きた後、青い顔をしながら事態を隠す妙案はないかと考えた後、やはり「あやまりにいくよ」と言います。作者は「いたずらっ子」と言いながら、そういうくくり方に終わらせていません。この年頃の少年の様々な姿を描こうとしているのだと感じます。

寺子屋での友達同士の些細な出来事から主人公が苦悩する話には「うんすんガルタ」（一九三三・二）もありました。三郎の特徴である古典の世界で、少年の心理の動きを描いています。一九三三年に入ると森三郎の作品は、少年の心の揺れを描く現実的な作風に変化しますが、これらは現代物への過渡期の作品と言えるでしょう。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品

（九月十一日実施予定、八月は休会）

「とんび風」「柏野大納言」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）